



参考資料9-1

ある實證に確據をもてかゝる言がある。油面をなすは種々の用共適具あれを先づ初めより器具物品は性質を説き然る後著色法に及ぶ。

画具

油面を用ゆる器具物品を色とありと名づる。先づ初学は必用なる品を油、假漆、顔料、毛筆、色料板、パレットナイフ、三脚架、腕鎮、画布、灰筆、及びはかり、研ぎねる厚き硝子の板一面を硝子うへに造る。ミルレルと称する見付お供用する。此二品は色料が練るため用ゆるものなり。

色料板は紫檀柞梅櫻の如き光澤ある木材にて造る。或は厚板を造りて一面を白き光澤をうけし見付あり斬る色料板は白く色及び変色し易き色料を板ふりて適用する。色料板は洗つて濡し乾き

主要なる其形、橢圓形あり長方形あり乙之方い色料を
 扱ふに板面廣き故便利とし木製板は色料板は面ハ亜麻仁油を
 引き十分水用り吸込め乾く度擦去乾く一翌日同水一所并
 如く水用り木用へ色料を吸込板面を汚さずなく又板面堅滑
 なる故色料を扱ふに自在なり板を反張或は疵の浮ぬぬふり忘
 れず清潔に拭き置くる事
 色料を扱ふに錫器を用ひ油或は假漆を以て色料板を塗り置くる
 可なり
 色料板を色料を混和せる色合を懸ふる具を用ひて
 色料を軟くして弾力の強き小刀に如き可なり
 研きたる硝子を用ひて色料を色料板に移す前此の板面を
 各種色を調合する又硝子に三三三の板を附屬せ

るもの多し其類を省き便利なる爲に今末より斯くする群青或は洋
紅の如き色料を煉和するものを用ひ
○方八寸より一尺程なる四角形陶器を二三面付ふ其色料を色料板
状面と色料多板の両色色板とを混和其色を變ずる故に色板を
色料と此器に止し置く時に面を清潔なる色板に置るは其便
利と其器あり又調和せし色料を其目を用ひ其色を其時其器
の面と色料を移さず其色水盤に沈め置き次は目の用ひ供ふるに
用ひ

○三脚架ハ画を作する時に面を掲け置くに重き三脚の器あり其形は
棒々おゆともラウイゼルと云ふ画工其意に從ひ掲け置くに其
面を自在に高低せしむるに甚だ輕便なり又其通當草一なるもの
も面を高底せしむるに木釘を備へたり 總て三脚架ハ其

丈夫より又ハ毛先は切割セヨヨリヲ撰ビ之ニ要シキ毛ヲ去レ
 ヲモ毛先々切リ去レ其アリ此如キヨリテ面入ハ一面色ハ濃ク
 其良不ヨリ細キヨリ糸の如ク其軟柔ナルヨリ其固キ彈力強ク
 掌ノ厭ハシクモ此面ハ毛ハ如ク彈ね返ルベシ形ハ平ク標形ハ
 七散乱セヨ毛ホキヲ撰ビ其毛柄ハ指ハ如キ木ヲ摩サレヨリ其長ク新
 ヲ柄ハ軽クモ撓モ心耐ク其清涼ナルヨリ柄ハ色種ヲ急ク辨ズベシ
 初子ノ物ハ面ノ撓振ヨリハ大筆ヲ用ヅルハ筆ヲ用ヅレ
 其面圓賦陋ハ陰ハ希ホテ殊ハ注意スル
 細毛筆ハ家々ヨリ果回ルハ其細毛筆ハ毛先細ク強ク此等
 其面黄色ヲ帯ハル種類ハ毛先直トモ久彈回ルヲ撰ビ一ニ四
 キ細毛筆ハ平キ分ヤ筆ハ其用多ク面ヲ繪成サヨリ用ヅルサレ
 シルテ羽莖ハ披ミルヨリ其筆尖利トモ又其面圓撓ノ用ヲ分テ羽莖ハ

挿入れを承け又ハ毛先揃ひを四角敷札にありて極下品なり狸毛
 等ハ色を^{ホカレ}單又ハ^{クマニル}淡注するものありて形大小あり他の毛と異なり
 毛先敷札にけり長良なるものハ毛長く軟弱ハ毛色又色異なり或
 ハ黒河等も皆ハ毛先純白なり此等ハ毛空なる面此如き廣き彩色付
 是れ翁等所共々同初學のため大なるあり然れども拙劣なる自ら乾草
 を用ゆる時ハ筆を破損しぐと狸毛筆に主と見やあるや用ゆるべき
 たる事先尖らざる又此ハ如何なるかあるもの之れと同左用をふさぐ
 又此等ハ濃き色料を用て廣き面を塗り良き又僅少なる彩付
 色を塗りたるに筆が細き筆の傷もあれば之れ用ゆるハ最初仰き
 筆を濡れ指を握り毛を能く揃へ用ゆる時ハ狸毛をけりて空の廣
 き面を塗り毛先へ画の具屢々粘着するものあり斯る時ハ筆毛を
 揃へて乾し拭きけりし切れるを拭ふる一はの如くせる面をあらうむ

の張り付けれるものあり。要布の地をふくむべき厚さを要す。最も織目を平
 分覆ひ糸めり節^{ツル}ふきを要す。――
 のヨイルスケツチングペーパーと称く。油画より寫景をふくむ用ゆる紙。最初
 二層を極必用なるものなり。通常は四層、或は油繪具を三度洗うく
 引きたる見ゆ。油画の要布は異なり。厚さ見下蓋より要す。輕便なる
 又下蓋をふく。或彩色を除去し種々色の試をふくむ用ゆる紙。或は通常
 長さ三尺幅二尺位より短なる廣く製造せざる故之を用ゆる時、良き得
 る切斷を適宜に画板に據げ、端の銑より四隅を易く用ゆる。或は紙を画
 布と同をふく保存するもの。綿布より裏貼^{うらひ}りおふ。或は之を木匠一張れ
 ハ帳に画布に画き、或は如く見ゆるものあり。――
 オアカデミーホールトハ。前条に試す。昔々、亦用ゆる。或は之より厚き
 板あり。一層より試す。多く習業より用ゆる。供ふ。前条に試す。或は之

厚き故画板に張るゝ及ばずは紙面に長二尺四寸幅三寸八寸位
なり

○三ノボルトハ右之紙板を厚し其の地を為さるゝ大り意を用ひし
なり唐紙牧馬あり長八寸幅六寸位より長二尺四寸幅二尺位より
河画の具を以て写景をなすに用ひたり

い能く乾きしは板に画を望み滑なり地をぬき備へ置て下は
極精密なり画おなりと書れ適用なり

○画布は地をふりしに色を傳へ種々有る地を必要なる者
より要しし地より美麗なる彩色をなす種々有る画布を
有るなり小糸の光景を画するに宜し地を傳へるなり但し所
よりある時は画布を水やを洗ふ美麗を失ふべし然れども
黄に黄色を洗ふと黄色を失ふべし黄色を洗ふと黄色を失ふ
べし黄色を洗ふと黄色を失ふべし黄色を洗ふと黄色を失ふ

其の或は色を帯ふるはれを良とて畢竟斯の地を日光を
 反射するの故に着色の層自より透明なり凡て泥面にて色種
 布面沈み一面面光澤を失ふ弊あり此弊を防ぐに地を煖ふる光
 澤ならしむるの外に所色め地をいふれ一同一用はるるあり
 斯の地の彩色樹皮滯るより故に同色からず或は暗紅なる地あり
 一は地あり此地に煖ふる美麗なをさるる醜陋なり薄く彩色せざる
 色科布あり沈み令く不快な色をさせず

○色科

雪や鉛、
 製せざるはれより現今色科商に需くあるを重り
 日耳曼製は精良なる炭酸鉛より之は緑黄赤色より白色と鉛の純
 良なる製造の精細よりより中々黒より白色と種類頗る多し
 希有派よりより普通如何なるものを用やると否はしめず

ホワイと優るに於て

○ナポリス黄色ハ酸化する安質母尼ヲ混合せる物トテ牙質綴

密々々々 透明なうす近景此色二種あり射する光をフレシテ
十元

と云ふ其色橙黄なりと云ふ和色也其光明なる大陽の色を現はす也と

も古製の如く暖色をふくむ適を以て古製の分には其製法

銅刀を同ゆるに摩摺せしむる色を換害と云ふなり最也

新創社今日
斯有障礙也

○工口、カラー、墨、黄土、
とて用、墨、以、廣、一、変、色、を、多、く、お、く、能、く、乾、

葉は白色を帯び、
アンデルスフリー
また花は淡黄色を
インゴ

4/15

ハ前條の如く、変遷と云ふは、内なる光澤邊師が、其

質
ローレンナと稱
言一然中も千は
紙釋や交彩移勝
り陸烈なる字

透明に綠色をかりり用ひて、輝照せむ、色をなす
 〇フアンカラーハ、故に色を強くおき、然るも他色を和して、暗くす
 是れ、色なり
 〇ローレンナ、是に、変色を多し、なく、透明に用ひ、當りて、甚だ貴重なる色
 料なり、山水画に、家用、甚だ、最も、黄色を、く、不潔也
 〇ドウシカラーハ、山水画に、必し、て、変色を多し、なく、色を、多し、色を、多し、暗
 黄、他、色を、混じり、て、美し、く、嬌艶、ある、を、多し、適用、する、を、多し
 一、時、て、画、中、風景、の、中、砂、杯、を、彩色、する、を、多し
 〇カドニウム、エルローハ、カドニウム、ハ、酸、化物、と、して、製造、せむ、黄色、色、を、質、輝照、する
 か、故、に、夕陽、の、佳、景、の、用、也、甚だ、変色、する、を、多し、乾燥、し、亦、其、に、速、く、なる、を、多し
 鉛、粉、と、混じり、て、時、に、爽快、なる、色、を、現、す
 〇ローレンナ、ハ、色、を、光、澤、ある、を、多し、初、等、の、光、澤、を、用、ひ、る、を、多し、速、感、に

参考資料 9-13

なるる事あり。然るに質を往換して用ひば、白く深なる色
 を現はしむる致す。あり。白黄、深黄、橙黄、紅黄、紫なり。
 柑黄 ハカミ 光明多き鮮なる色。科 ハカミ 多くて日光の照輝せる
 与照なる事、色を改めたる事なり。
 印度黄 ハカミ 清艶なる黄色なり。濃き赤色なり。良あり。
 正黄 ハカミ 光輝透明なる黄色なり。植物にて知れざるものあり。乾き
 雲く又日光にあり。容易く変色す。樹葉を画す。潤色 ハカミ 多し。
 通用す。
 朱 ハカミ 赤色なる事。たゞ赤色強烈なり。暗体なり。赤く類極する
 深紅 ハカミ あり。又黄紅 ハカミ なる事。黄黄 ハカミ 多くし。赤く用ひば、
 白く群

○ハルルレーキハ時として美麗なる蔭影を成るに用ひ此色料は三種の
中より第一番最も少く用ひられ此は他枚移あり

○タムレーキ即チインディゴハ美明チに濃く且り呼喚美なり能く永候を成れ
る此はタムレーキ及びマカインラウを同ゆる故に用ひあり

○群青(ラピスラズリ)は美麗なる藍色にて其色種をあり次第に多量に
て濃く濃きれば右に向ひ光輝せる色を至る蔭を成れば透明にして
他色と混へ清浄かり能く是は用ひ便なり此は光澤を成
し又至る空を成る色を現はるは此の色料のみを用ひて其色を充備
するも至る空を成る色を緑色所色をいし他色と能く相混合し
油質を成るにあり諸般の色を光澤を成る或は空気の色を施すに探
用なり

○此精群青ハ色料中最上等のこれなり其色深濃にして白と和すれば清

淨なる色を現はして群青は為さる故に用ひ難し。水杯を画し
ハ以外に似せるはれを用ひ。伊蘭西群青を得て之を以て朱紅群青を用
廣まりて佛蘭西群青は蘇侯の如く常用の紅を以て適当の色料と
す。

○アルトリンアセス。ハ群青を抽出せしむる法なり。是は藍色ある明礬質の礦物の灰
なり。其色鉛の灰色とて冷なり。藍色に移るや其美あると色は力と
ハ群青の如くも甚だ必用の色料にて其灰色あるハ木炭の灰とある
色を現し。又天竺の灰色或は山灰の灰を以て最も通用の
但其他他色を和してより群青の如く色を一定せし法なり。其蒸氣の灰
色を要するときは天竺の灰を以て妙なり。アルトリンを抽出し其最良の法
なる也。アルトリンと稱す。

○伊蘭西群青。ハ貴重なる色料なり。其色は暖なり。少く透明なるは其
アルトリンとアルトリン

侍りて此を合玉山水杯を写し、紙粘膠者、代用此穴を著く、
一、厚紙より光輝あるを紙粘膠者、及ぶ、色紙厚紙なる之を
お裁き、又此の色紙に能く乾燥し、下書する、此の色紙を
をせし

白濁ハ、主に赤杯の所、紅なる黒色を現はせ、沈むる色あり。
代糖をかたれども、黄皮あるやうをあらうと良。又
れも、黄皮ある皮色を現はせ、トハ群島の如く、濃くて光り、やうな色は、淨
弊多かる。他、黄皮料で勝れず、又乾燥し多く、或いは空杯を写す如
く、沖き重なり、膨腫と云ふより、黄皮を混合し少し、尿色を生じたり
るあり。

ポロヤブリ 和俗ベニスを濃く透明なる強き藍色に易く潤色
を施すに便なり其色緑色を含むは赤色に如き混和を以て重々山

水と用也

○アンデルフグリー、ポロマンブリ、王冠光澤多く他いふと暗るなり、其色甚だ濃し

○靛花、ハロスマンブリの如く、芝居に能く乾燥し、又は用ひ、厚紙に潤色を

機も良し、山形画を多く用ひ、大概、ポロマン、或ハアンデルフグリー、(黒)を明けて

用也

○藍墨

アンデルフグリー(靛花名フル)ハ、藍墨を多く溶かし、ぬを画くと、灰色を成し、或は、赤色を

混合するも適用也

○油煙墨ハ、ぬり、灰色を、用ひ、大概、藍墨を、用ひ、故に、色、斜ハ、暗る多し

○灰墨

アンデルフグリー(靛花名フル)ハ、藍墨を、多量に、透明に、ぬり、必用なる、色、斜あり

○ボント、テルス、シレンナ、ハ、多量に、ぬり、灰色を、用ひ、藍墨を、混じ、赤色を、加へ、水

一画り、用ひ、又、ぬり、和、灰色を、大、陽色を、模し、色を、多量に、ぬり、乾き、易し

○アイヌ、コランジ、ハ、人造の、赭石を、用ひ、ボント、シレンナ、ハ、ぬり、色を、画し、外、ぬり、透明に、ぬり

白と混せられ、艶色を現し併之を以て銀色と作る。此に
 〇柑黄朱 ハ極黄色に銀朱あり其色強くと其質は他は銀朱より
 〇ラズルニミララン 此は如き赤色にて色を混合し清く溫和なる肉色を為し、暗調なる空
 色画くに適用に
 〇ビシキキフワシ (ビシキニスアイス) ハ高明なる色なり、永用し堪ぬる乾き難し
 〇コロシアイス ハ其質、ビシキキフワシに類似せしむる、白と混合し其より、ビシキキフワシより、
 此は赤より又白色を為し
 〇カバダイン ハ其質、白と混する色の色料なり、乾き速めて速く乾く
 〇ボーンブローシ (象牙を焼く灰) ハ乾き難く用ひざるを要し、云々、白と
 混合し其色は銀灰色を為し、用ひざるなり
 〇アスハルム (トルネシ) 白く溶解する者、ハ其色は白色にて、強ふる速明なり、之を備
 するに、陸軍あり、乾き速めて速く乾く、白と混する、用ひられ、乾燥せり、時刻目と

生れ初まの如用ゆる艶ありまじりしを新くあがきて假添ふも云ふ
 其質透明なるより多く陰影を画し用ひ或は潤色をわき
 ○パシエマンハアスハルキエムをスライゲライルと混合せしむるなり
 ○マダラ、マダラハ甚根ありせしむる貴重なるものにて其色紅や黄を色より新製な
 るに深濃透明なりて華麗なる陰影を写し軟弱なる暗黒をわき用ひ或
 高き色は用ひて変色するものなり其乾き良し水画に用ひばクレ
 パリキと混ざれば灰色なり艶あるも此を生じ又フルトと白を和すれば
 清潔なる灰色を現し甚しく光澤ある黄を之れと混和せしむる荒々
 なる秋葉の緑色をわき
 ○アインバーハ黄を色より淡くする陰影を写し軟弱なる灰色をわき用ひ
 ○パシエマンバーハ絨緞なるものを色より深濃く写し同く或はパシエマンバー
 用ゆるものあり乾き甚く早い

テルレベトハ山あり水ありなる草木は緑をとり
 インジェレッド及し
 ナルモローも混入されて中葉の用ゆべき深緑計せし緑色を現はる色中
 透明あり乾燥しる
 緑色酸化
 ナリシヨキヤイト
 ハ濃き緑色より黄と赤とを混入して赤用より赤色類
 微密にして勢力ある故に紅を多く用ひしに
 極深なる色を生じ白
 多量を混入しては緑なり
 緑色を現し
 光はより銀色を合し
 空気を
 杯を写さる妙なり
 〇インジェグリーンハ文庫ある緑色なり
 白く色は強烈に過る
 赤河細心
 して用ひられ
 軍中赤果メ人物の衣服杯と適し
 又ハ清酒なる
 端舟杯は紅き
 より良し
 赤色もさる
 なく
 色と混入する
 又ハ赤か
 〇インジェンガハ多量なる
 橄欖色より或ハ緑色を帯し
 或ハ極黄色を合す
 色は深く仕用し
 仕用れども
 乾く
 雲く
 潤色を合し
 稀薄なる

此に黄をさるるあり

○ベリックルの黄を色とくくニルベトと混ト紅棕色をさる或ハレーキを
和すれハ弱艶ふり紅黒を腐さる良矣

油并り假漆

○ベリックル 漆並り色料を仕用し適す或も之を濃淡を調和する日用
也るハ漆をベリックルと云ふ色料の色と此ハ流布物と混合する日從ハ
或も爽快なる色を現 或ハ暗黒なる色をあら

○ベリックルの色料と等しく面工に用ふる物と見ゆ面工の意に適す
むるためハ種々變ふる要を免れざる今も之を論ずるハ此の如く
中最も必用なるハ此の如く

○漆と油とを假漆とする相混合する物具の色と多少隆降を起
さるのあり油面を望む一するハベリックルの仕用便より早布易せ

時、佛堂のしき清浄なる質を要する時、其質の色料を要する
 とき、あまた又、物質の質を要する時、其質の色料を要する
 とき、油（ビツクル）は用ゐる。油は、無灰仁、胡桃の油あり。或は、ビツクル
 を用ゐ、又、スパイクレーベンゲを掃き用ゐる。あり。
 諸師、此中より、無灰仁、油を、常同く、其の色料を、或は、琥珀の色を、或は、
 ちり、暗なる色候、に、用ゐて、令く、乾、晒、し、用ゐ、適度、を、得、ん、に、乾、する、
 其、其、良、く、昔、同、く、あり。
 〇古く、油に、理、面、果、の、油、を、て、其、の、質、強、壯、し、て、粘、力、あり、乾、燥、する、り、才、
 く、油、を、然、れ、る、り、色、料、を、多、色、せ、し、め、故、り、白、く、外、淡、色、あり、陰、具、を、施、
 する、用、也、
 〇胡桃の油に、無灰仁、油、理、面、果、油、より、其、質、強、壯、なる、り、長、く、乾、燥、する、り、
 多、量、あり、

田口石を取出すと最にも色料の位置を混亂する事あり、通常用り
多しニキルリもマスノウリバニシエと晒乾油は昔ながら濕りし製法なり
これより取付を静しや、もれを膠質の撥膜を為すに色にお混る事
ある晒乾油は黒白の程で変り最にも赤やある種類ハ晒乾油を用ひて重
麻仁油ハ砂糖の細主粉に少々をかくしるれば赤き粉も混る或は砂糖一部
に重麻仁油又或は鹽菜の油二部を油に之を混和する迄能く攪き廻
しマスノウリバニシエも二部かく又之を攪き廻し、製法よりればあり如法く
せし白き乳酪の如きを得之を用ゆる時、味付おれし乾燥する時、色と透明な
るればなり

○画工ハ油を多用するはあり或はニキルリを用ゆるればあり各所、如し
と名ト之を用ゐられし初学のればハ不便なる所なき単純にして便利なるを
探るハ、最も乾きの速き器具も混る事あり、細き砂糖を混し乾燥め力を添へ

下と空板の明かるは、晒乾油ぬいメキルヲを用ゆるを基むべし。又、
べじクルを製法するに、最初と精密ある分量を得る。甚だ後一此の配
換を、其仕用と適する製法を、今得るべし。

オマスチックバニレエ
 ハネ香をトル。ンサン
 油にて炙くべのり品を
 假添も用い又々常用の
 混合
 正さしぬかり

のフールバニシエは油と混じる器具は乾燥を助くるにありて是れに
シヤシとて腐病を治るべしと云ふに用ひるに此より然るは油
のみを用ひるに要す破損する事あり故に他油を混じりて障害を
妨ぐべし。

いアバーバニレコハコーバルよりハヤ色暗く易ッ乾く事其れを「めれ
た」に價値と云功換するお平均と云ふや否やは未だ之証を得ず

第二章

着色法

の油面を掃く、種々の着色法は、初學者の爲に、斯う方法を心得せしめん、爲め之を、解説に

潤色法

潤色は、薄く透明なる色料より、既に彩色せる色に層々膜お流れ下層の色合を、また或く之を、^{ウツリ}素潤や、むろをかき潤色を、流し、是れ其に下層の物、形、微細と見、是を、爲のり、に、其困方、に、役色を得、べし、此の法を、施すに、大々、適宜に、透明なる色料、に、ニギル、か、或る他の假漆を、混入、面中彩色の、廣、狭、或、に、淋、瀝、或、に、点、着、する、あり、

此法は、又、如、除、影の色を、強め、又、其、色を、艶、あ、る、の、或、に、さ、る、る、に、又、光、りの、餘、隙、を、減、或、に、彩色、に、熱、力、を、得、く、其、無、か、ら、ぶ、を、補、ふ、の

かり或て國中一部は色を却照せしむるあり所る時に先り却てくき部
の色より一段潤けある色より十分の千部を準り陰し厚ち潤色を施す
一箇常潤色下地の色より和暗味ある故に所る彩色を施さくま
めめ下層の色に過分り却てしむるも空則とも潤色を為さくし其初
り不當に多潤ありしは此程より色をあるなり此の法に依て厚き透
明色も現るなるなり其透明ある色を用ふるあり一画中暗味より分
明なる部は色を薄く或は煙霧塵垢杯の格段ある趣を顯り右の
寸透明ある色を用われし中効勝て好し斯る暗色なる潤色を施すは預め
意を用ゆる事緊要なり何とかれも暗色過なりて透明を失ひ掃拂ふ
所し方法はいかに緊要なる方法を施し効接も得るなり此接し思ふ所
を要する潤色は其要を設色は其調和の色は熟カ先づ其備ふ
るあり潤色は其ために固類あるなり初め此は細なる色をふれず却て

一面を銀粉塗りしもの、潤色を施すに欲くばらざるも、あつても若し他を施さ
 り若し之を見ればあれは、大に從ふに、施すたのち、畢竟潤色を施さざるより、面は、俤り
 重明を得るを好むを、れを、知り潤色を施す、蓋外のるを、銀塗り、古切を、以て、その
 料を、拭い去る、若し、斑を、拭け、此等の、を、得れば、拭き、去りて、拭き、去る、あり、但し、色
 料、作、固着を、さる、内、連、あり、拭い、去る、下、塗り、又、下、塗り、の、色、料、を、乾、この
 さら、内、潤色を、施さ、る、なり、す、

東國法
 イタスナゲ

油画にて、固の、除、影、暗、黒、なる、部、に、色、料、を、厚く、布、着、され、る、光、輝、せ、る
 部、に、手、觸り、濃き、色、料、を、含、ま、る、厚く、輝、着、す、前、記、を、拭、け、白、く、し、縦、に、色
 料、を、糊、粘、り、固、着、せ、る、む、然、れ、も、目、之、の、節、や、部、照、を、さ、る、部、に、色、料、の、面、甚
 だ、粗、荒、か、ら、ざる、を、要、す、輝、固、法、を、得、る、に、制、限、さ、る、事、あり、若し、固、着、あ、ら
 なく、厚く、色、料、を、固、着、せ、る、限、り、を、面、に、以、記、せ、る、と、し、は、是、等、せ、る、部、は、俤、り、す、

色彩せしむる甚れ厚く濃やかた下但し潤色法は如く能く乾燥せ
 る後施すを要す此の彩色をある部は赤く清涼なる所色を有
 一朦朧暗味れる部を現し或は全く近き見ゆる物なり其に果を紫く遠
 隔を青く極々ある所は故に色料を極く改良し物形を狭細明瞭に過ぐるを防
 ぎ色を強烈なるを減し或は色を互に希く競合（主知）せしむるを暈し以て
 市調和やゝあるに用たり潤色法は濃淡法を巧みにお混用を以て多艶色を成
 せしむる得易法は安用をせざる歟他法は依りて改良しあるを誤謬を修
 理するに便なり濃淡法に依りて除影の部を施さざるを要す其に果を紫く
 為めりて遠明を損害す

運色

シンドリゲハ字の運用をある技藝者林泉や青の光景をある大々其方法
 をは用する可工の脈に運るに依りて頭多く運るに依りて自在に用

八解き明あさきく明瞭あり

并に文章

着色順序

凡そ着色を画するに一定する法則あり。畢竟如何なる方法に依るべきかは
作画の善美爽快なるに依りて一たれにあり。實に巧妙なる画師は各自に一
個の法を設く。然れども大なり多きは原意を失ふべき方法あり。此の方法は
初學者の爲めなり。當時良工の如く画家は亦これに依るなり。
画をなさんと欲し最第一は筆をさぐき、^{カハス}筆布を撰むにあり。一丈一尺、寸内
一尺、寸或は二尺、寸、尺、寸位。余り意に付て、或は寸、或は二寸、或は三寸、
取柄は不便あり。又筆はさき、身陋き、て成果甚だ見憚り。
画布は地は光澤あり。然れども、色は、先づ画くべき物に輪郭を
分明に引、下画をなすに、是を時を要し。技巧も得て、一は、この画具を用

依りて之を得たりあり而方一着色するに固此方なる上部の角隅に初め
逆吹りたる方へ移り等鋪を以て面布を打叩く色料を布着さるゝ色料を
全濃からして淡薄からしむ一程からしむるを要は器具を脆弱より自在に
使用するが程よく油を加ふゝ然る時僅に色料を濃く布敷せしむる有
き属へ少し許し色料を附着するに短きより長き色料を面
に重復して塗抹されし程より物形を撮り或は合成を始むゝ光りを煉固する
より等鋪の程より長きを長より短きより余り長くし腰より弱きより一毛軟
弱より強きより要するに一彩色より光り稀厚く布着されし程より影に
稀薄し彩色を為すに連日凝滞せしより等跟堅固なるを要は布着
せし色料をよりより再三混合煉固するを要は然るに色料は
色料の質を損害さるゝ諸色料を結し固和混合するに惜し夫れは適宜に
部より第一に色を移し候ふべし但し各色お互に混ざるを要は然

空に湿しを染むるゝめ何れも過量の沖のて面を止まらざるを要し沖
 の多分たぬい滴或は染るゝなる切きて拭い去らるゝ初に彩色をてそ
 画中物体の形状を巨細に現出せし陰陽乃に返照の湿色等も精密に画
 き物体諸部のき近き分明なりとあるあり
 陰影に属する遠明の着色一或は物之形状をとりてその面を現はせ
 たり光の色の色を渲淡しとあるは錯合なりとあるあり光のよき色料を
 厚く着し大に混濁しと各物に形状をあると一光の強くを照せし
 こと明瞭に画する端を接合せしとある光の塊をふるふに初
 全く白く画き次り潤色しと一程より色を生ぜしと二彩色より
 粗多し畢する用い各色をより畢満を成し平展のなみ跡をを掃ひし
 色を平潤なりと一以て画面を平直なりとあるなり初
 のより修景を終る光潤なりとあるなり如何に何れも修景の時

之空を圓升大切なる部より一室を畫し移るる色を空圓面一併一
 室係るる見ゆ如くして空の色を初面あるより中を漸く一色は強烈なるを漸
 次と強はるる漸く色を多し其順序にて空は最も高き處を深く一地平線の
 方へ下るり徑に次第とく色を稀薄なりと云ふ地平線より下るる藍色をく減し
 面の越る夜朝夕の光景は徑に他の色料をも用ひ至る大陽は接近するに徑に
 色を光河より云ふるを要す移る天空は藍色地平線と圓の最上方部分から
 天頂より漸次と變化するに故に夕陽の景色は天頂の藍色地平線の黃色
 及び橙黃色と漸く階層となり其階層をより此色噴き藍色より青蓮色に移り又此藍
 薇色より漸く地平線に黃色と混同する是れ夕陽の景色なり他は強烈なる
 色より色は遷移藍より青蓮より天をたれり移る橙黃色に移る此れあり藍色
 より橙黃色に移るに漸次より一階層見ゆ然るに去る地平と交接する天空

天竺の混色

ネーパルスブル、白、エルローラー、白、朱、ネーパルスブル、白、洋紅、ネーパルスブル、白、

朱、ネーパルスブル、白、印度紅、ネーパルスブル、白、洋紅、ネーパルスブル、白、

白、混色、色、各々、濃淡、を、あ、ら、わ、い、白、色、の、多、量、を、と、る、

要、を、あ、ら、わ、い、左、の、色、料、を、要、す、

一、フレシケブル、朱、白、一、フレシケブル、イミダヤシレット、白、

一、フレシケブル、ローアンバ、白、一、フレシケブル、ローアンバ、ネーパルスブル、白、

清、郎、あ、ら、わ、い、左、の、混、色、を、あ、ら、わ、い、と、る、

一、洋紅、代赫石、白、一、洋紅、代赫、エルローラー、白、

稀、有、あ、ら、わ、い、時、々、許、の、色、料、を、用、い、天、色、の、地、り、希、色、を、此、の、色、料、に、

希、色、を、と、る、調、和、を、と、る、

一、フレシケブル、代赫、白、一、白、上、白、上、洋紅、白、

陽を清く昇降するを要す即ち先づパレットナイフを用いて色料を板面へ天色
の色料を塗り置き昇降の先より此色料を拂掃し此等を行つた後
暗黒なる部を添添し天色を板面よりぬき去るを繰り返す
顔料現る一昇降をてん色自在に信用せし紙を状をせし一層下
る空をぬき終るより色をせし一層下る空をぬき終る
同様にぬき終るを繰り返す終るまでを繰り返す
ちを希色とす

遠景

天涯ハる空と地平線の境界より一は此線より下物形を画き始る
天の地平線より一は此境界を分るためて空を混色する
すを分る

此際より空より色をとり彩色し初めより灰色より色を強

よりきこえたるを基見たりとて頂の色を陰陽に依りて分界明瞭あるを
星々の空のり見れば中より常に三昧なるを云々物より起る世の理
より一假令其を這樣とする速隔するに頂に却て其處有分明りある一
清朗あるを此色を合てお故りき隔する都に大空の色を以て色と見
つ物形詳細あるを要り陰陽此分を以て理と云く一見之をき
き物体の輪郭ぬい彩色りねて要るを以て色と云く一見之をき
或は清朗昼夜の模様を依りて物体の輪郭彩色を以て色と云く
遠景を以て一色の理を以て合得たりとて好むを光と云く方々容易く見られ
る時空なる色を以て一色の理を以て合得たりとて好むを光と云く方々容易く見られ
るより近い感じよりより空の色の色は増かするを以て一色の理を以て合得たりとて好むを光と云く
よりより依りて物形あるを以て光と云く方々容易く見られ
るよりより依りて物形あるを以て光と云く方々容易く見られ
るよりより依りて物形あるを以て光と云く方々容易く見られ

従ひ光ある者に其國方の色を擬せざる事屬して暗黒なる物体に其色
 を連り失ふ故なり然れども其方を見し時倍光二物に色逆なり一は其色
 空素の接相に依り多あり綠色又他は其相ある色料を巧り要之施
 して其相合而の趣を鮮明なりとするを要なり時とて空は未だ
 終る可なり時遠景を面さ目つて空の下彩色と同し色料を用ゆる事あり
 但し其色を少く強烈味なりとせ然れども其彩色とて右の如く爲る事
 巨細にも異なり施し終る時其相清涼なる色なり又鮮艷なる色料
 の相適中なる面さるるを以て遠景の色彩を添へ終る後其相の
 色彩を以て物形を面さるる

中景 前景に地を線と其相の部を要す

物体の前景に近づくに従ひ其色を少くし其相を多し其色を黒白
 黄の判然しるを要す其相弱なる灰色なりとせ其相を多し其色を

<p>丹口字を杯にナリ、鮮艶なる色を施す。</p>		<p>中黒を多くし、天竺を多くし、法剣を以て、中黒の最も切要なる事 ハ、中黒の最も切要なる事、自より目を爽快ならしめ、物形の性質、設色を 以て、眺望の趣を免備せしむ。</p>	
<p>中黒より用ゆる色料</p>		<p>一 ラルレ(ルト) 一 朱 一 インジヤン・レッド 一 レーキ</p>	
<p>一 フロシヤン・藍 一 エンシヤン・群靑 一 ネカリス・エルク 一 黄土</p>		<p>一 代赫 一 マダラー・ブラウン 一 ロース・スチナー 一 バリント・スチナー</p>	
<p>白色を多く混じ、濃淡を多し、多き色料</p>		<p>一 群青 一 白上、代赫 一 テルレ(ルト)、代赫</p>	
<p>一 エルレ(ルト)、代赫 一 白上、朱 一 白上、代赫</p>		<p>一 白上、レーキ 一 白上、ブラウン・マッダー 一 同上、フロシヤン・藍</p>	

参考資料 9-51

有る諸混色を其色鮮艶あり弱艶ありをめんことを黄色を混さぶ
し其混合に赤や白やのみを最初と定めて黄を加ふべし其色相を失ふる
法あり

樹木

樹木の各種を分るるありあるを要するより其色を画くより色を葉の形と
りて枝の模様より画くあり

多量なる樹木を多量に其緑色の月々近接する時鮮く其色を其形
收攝するありあり多量合する樹葉は葉の形状を一と画かざるは其痕の
宛急を以て模写しきより其望むる樹木の種類を分るるに乏しむる
を要す

中景より地面の樹木の緑色の地を深き近くは径の空氣は其色を

漸次帯々たる妙あり但し諸々の光りを受け光輝の偶然重々たる相射
 るの趣も失ふやうなり之を知り分るを割然あらず如く是の遠近の
 一たつたるあり斯る光の都て是れ輝可しめ最果の光なり軟弱なる
 し又の色は黄色を金とあり或は紫色あり青と極色あり橙黄色あり
 右の色斜りに三ヶ所を白と混し之を多分なり合ふ如き汚點あり
 て樹葉を画くべし此を多量に用ゐるは美麗潤澤なり其後ふさき細毛
 予を以て形と點を移りたる形と爲す斯る樹葉を又勝体たる色を
 以て再び移色し之を此の光を受る如くして空の明照を都て是れ
 澤美艶なり如く天外の景色とあり合さるゝと銘て是れ衣の光澤なり又
 空の明照を受る故に樹葉の都て是れと合さるゝと空の清涼なる如
 き色を受けぬ如く然らざるべし
 樹木陰影の深きふさき如き修長なる色を施し全体平穏なりと樹木

せりを降くき降くを樹枝にありて弱ある勝色を
旗にうつりて依りて近きゆゑの強を降くき降くを
旗にうつりて依りて近きゆゑの強を降くき降くを

樹木の枝葉より枝と幹と鮮明せき差りを顯さんとせし最初より都を高く
隠れせしめ幹より枝よりボロエヤンブルといふ色にレキミの混合の妙き光物お
る色より潤色より後ち暗黒なる色を以てして近接の都を彩色をべし併し
最初方樹葉一美麗なる緑色をふふべからず乃ち所色より緑色を以
再三と中より又潤色より漸々葉の鮮明せき差りを去りて漸く樹木の外
の物を彩色せしむる爲め葉の都を以て画くる事必要あり

了空其部へ租税ふす樹木を色くす處多しなり天竺僅少なり樹葉
 を形方所多し色斜して深汚さる故り今も天竺部より清浄を拭ひ去
 るべし又樹葉より刃や毒より今も空の色に樹葉の乾きより落すも空色
 といふ

以上有以現出也

樹木は蔭を用ゐる緑色を、葉多和（あ）を以て種々の黄色を混合して用ゐり
借ふ此調合より生ずる橄欖色を含める緑色の温和なり。陰に、適当
せしめあり楊柳の蔭影の如き光明ある茶色を含める色を要する所ハ
黒い、オパールズエールと并々白を用ゐ右の鈍暗なる緑色の端より紅黄色を用
ゆる所に黄白色も混入せらるべし然れども希し今更なる所の緑色の類を造
るべきならぬ。めき日本國方の青蓮色を帶ぶる時に先づ空を素地色を著
け然る後ち「フレッシュブル」を用ひ樹木葉を整頓せしむ「オパールズエール」或
「エルトン・カシ」を「フレッシュブル」と混じると緑色の洋紅或は代柿を以て赤や色を
破く又は色艶を減少せしむるを得空氣の色を得んにより人多少の色を加ふ
樹木を面々必要あるもの枝を掃き其中央の部分を軟弱な層を掃き極小の
間隙を見へ透くる光を起し置くべきに於て鮮やかな色を得る。

多り斯くは、塙固樹澤せる趣も過く趣一
 樹木の莖幹は多うして然る色の類似せる葉を色とて幹の形を画す鉛筆の
 先を細く尖るを色種の止まり巨細なる模様を引き又全体乾燥せるの思ひ
 少許へハントスーンとの混合を以て最も近きもの名の鉛筆は痕跡潤色を施
 し諸系は破隙は其の模様を現せしむ又多うある一隔りする幹は近き
 点の多うして遠ざかりし類に若くある色を以て深淺一皆清々地とせ
 るお眼目さしむ幹の多うあるとくも時思ふれし「カロスヤ、ゲリヤ、レンヤ、チヤ、カ」
 を用ひ光りといふ「テルベル」し「チヤ、カ」を用ひ葉は模様を画す細く
 尖りしる狸毛筆を用ひ葉の遠く遠くは從い漸次之を塊徒々如く画す
 到り
 次り説くは此器械上の着色は樹葉の多うなる葉を依りて之を色とせしむ
 古き損ふる筆も筆の毛不足し毛先は極なるを用ひ粗雑なる筆で痕を

題より好む時よりて、其色科板より要直り予を厭ひ、白く或は横り厭ひ
 予は此時自方毛先を教れや、此れ先の色科を念ひて之を隠し保ち而
 而は筋を又ハ衛き泡を搦き列し、如き樹葉を現し、後ち細き家毛を或ハ粗
 毛を用い、其色科を乾らするなり、固形の形状を画く又法より粗毛を予を
 用ひ色科を念ひ念ひ、此之を掃き置りて、而ち掃き拭き毛先を別ち
 此れ先より軽く予を便し、樹葉を画く事あり、草葉を画く事あり、此
 中へ軽く予を解れ、不規則ある草葉、其れ自在に繁茂する趣を教れ、
 此予編より衛き或は予先より方人、飄四より、草の教れざる莖或ハ
 種より、毛先の細き粗毛を右の如く用ひ、若し法ハ、唯其樹の草なる
 餘程より云ふべきに、此れ而れより遠くある、初候を題より、此又一科の法方
 り存ふるなり、是なり。

面中茶色より既に用いたる色（下の色料を如く）

エロー・レキ → レモン・エロー
一 黄江 → マグネ・ブラウン
一 ベネ・サン・レッド
一 ローン・マカ

江の類より外乾き易き色料は、漆工の用ゆる「ゴールド・アイス」（金粉杯を著る）
するに用ゆる地あり）の如く許を加へ（逆より乾燥しき力を与ふ）→ 前記を画す
如きより、或先づ「ミルキ」の色料の「バント・スー・ナ」カロス・ヤング・ブルー」或は「リカ
ミル」を十分含み、如く種々地塊積を置き、物体の形状・厚・疎を要
定め、然る後、細き線毛筆を用い、詳細の都り及ぶまで、色は「ロー・レン
ス」藍を用い、陰影の都を彩色し、光景は「ネー・カ・ス・エロー」を藍を用ゆ
乾き易し、予も藍の精妙を著る、一々面白ある地塊を毀し、覆盆子杯の
板の如く凸出し、さうり絶ふ所せる模様を画す、同の度、年をふさぐ、
端つ折、如き物体の詳細を画す、画き、後、再び背景の地を平坦ならぬ
物体の形を鋭く、さうり度、年をふさぐ、必要あり

植物を画くには、一般に、その形、色、質感、位置、背景、光の当たり方、
 影の落ち方、など、多くの要素を考慮する必要がある。特に、
 色の表現は、その植物の特性を正確に伝えるために不可欠である。
 植物の色は、その種類、成長段階、環境条件などによって大きく変化する。
 例えば、同じ種類の植物でも、春と秋では葉の色が異なる。また、
 日照の量や土壌の成分によっても、葉の色や質感が変化する。したがって、
 植物を画く際には、その植物の生態的特徴を十分に理解し、観察する必要がある。
 観察の方法としては、肉眼での観察だけでなく、顕微鏡や分光器などの
 科学的な装置を用いて、植物の細胞構造や色素成分を分析することも有効である。
 また、植物の生長過程を長期間にわたって観察し、その変化を記録することも、
 植物の生態を理解し、正確に表現するための重要な手段である。

め如き法より紅を色を以て教多し餘條を引くを要し
 偏て右等法一なり施し難き事多し若し自然の異同を顯るる處に
 能く底をさるを爲さしむるなりハ是即ちある色相を以て色地境續
 を同色一法より詳細なる事を爲しむるべし
 堤塘を以ては樹幹或いは水に映るる樹木杯りて近きを顯るる彩色に
 美麗なりと知るるを又多く能くするを以て樹木地相繼より
 切れ切れあるを又同寒とす
 水を以ては静止流動ありて周囲の堤岸より對して是より近き全体平均を失ひ
 色は顔調整もするなり屋を以ては水面より寧ろ遠き方の流瀑や或は静
 陽ある湖の昔り流るるを以て同法平均全體を以ては地を優るは地ある
 べし又も物形を映し画中の物形を互顯し又も都めて空を下降し赤雲
 の邊り或は赤雲の所ある陰影のい暗麗ある色地裡りて空の赤雲

白色を来す。大に至るは便を佛の教調をさるるはあり
おれ自然の色を陰うて、多々あるなり。一、砂、泥、灰、石を流れる
如く、如く色を来りたり。現るる色あり。
遠東に地を海と稱し、海の色を白く、故に國々各部並に來るるは、
分りて、色を来す。如く、地、砂、石、草、木、或は灌木、杯之致
種を画き、美麗なり。一、如く、遠東の空、白なるなり。一、牧草、杯の種を来さ
る。如く、画きて、然る景色を能く描出する。

油畫の尊さるるを 終